

# 15 曾我兄弟仇討ち事件の謎

～事件の政治的背景～

## 1 事件の概要

〈史料1〉は1193（建久4）年5月28日に起きた曾我兄弟の仇討ちを記した『吾妻鏡』の記事である。伊豆国の豪族伊東祐親の孫曾我祐成・時致兄弟は、父祐泰の敵を討つため、同族で源頼朝の寵臣である工藤祐経をかねてからねらっていた。そして、頼朝が主催した富士裾野での巻狩の宿所でその目的を達成したのである。しかし、兄祐成は北条時政の腹心新田忠常に殺され、弟の時致も頼朝の宿所をめざしたが捕らえられ、後に処刑された。

仇討ちの原因は伊東祐親と工藤祐経の伊豆国久須美荘（宇佐美・伊東・河津一帯）の支配権争いで、兄弟の父が祐経の従者に暗殺されたことにあった。父の死後、母が相模国曾我荘（神奈川県小田原市）の曾我祐信と再婚したため、幼い兄弟は曾我を名乗ることとなったのである。

しかし、この事件は単なる私的な仇討ちではなかった。もっと他の政治的要因が潜んでいたようである。それは、①仇討ちの際の死傷者の多さ（『吾妻鏡』では祐経以外に10人の御家人の名をあげている）、②事件後、頼朝の弟範頼が失脚・殺害されたこと、③有力御家人の大庭景義・岡崎義実が失脚・

出家したこと、④常陸国武士団の肅正、などの出来事が仇討ちに絡んで起きたからである。これらの事実を根拠にして、仇討ち事件の背後に隠された政治的陰謀を解明しようとした学説がある。次にそれらを紹介する。

## 2 背景にある政治的陰謀

### （1）北条時政による源頼朝暗殺計画説

祐経を討ち取った兄弟はさらに頼朝の宿所に向かった。兄は殺されたが弟はなおも突進し、頼朝も一時は太刀を取って向かおうとしたほどであった。兄弟は頼朝をもねらっていた可能性がある。そこでこの事件は、頼朝挙兵に大きな功績を残しながらも報われるところの少なかった時政が、兄弟をそそのかして頼朝を殺そうとした事件であると推測する。下野・信濃両国での仇討ちに失敗した兄弟が富士の裾野で成功したのは、駿河守護の時政が狩場設営の責任者であったからだとみる。なお、曾我兄弟は北条氏の従者的立場であり、時政は弟時致の烏帽子親でもあった（三浦周行『歴史と人物』、石井進「曾我物語の歴史的背景」（『静岡県史研究 第7号』））。

### （2）伊豆・相模両国御家人の武力衝突をカモフラージュするためという説

仇討ちが起きた当日、大庭景義・岡崎義実を中心とする相模国御家人が反北条のクーデターを起こし、富士裾野で両勢力の大規模な武力衝突が発生した。だが、クーデターは失敗する。そこで、両者は妥協して事件は単なる兄弟の仇討ち事件にすぎないとして真相を隠そうとしたとする説である。仇討ちの際の死傷者の多さもこれにより納得がいく。そして、事件後に大庭景義・岡

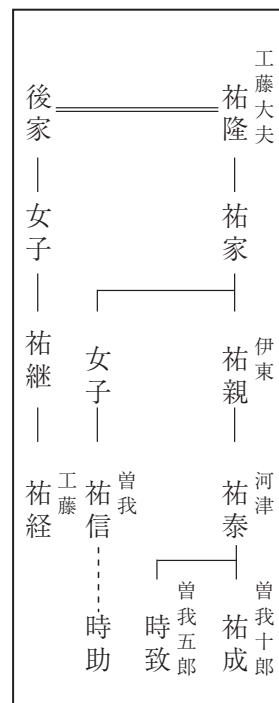
（史料1）  
廿八日、癸巳、小雨降、日中以後霽、子剋、故伊東次郎祐親法師孫子、曾我十郎祐成・同五郎時致、致推参于富士野神野御旅館、殺工藤左衛門尉祐経、（後略）  
〔静岡県史〕資料編5中世1 234頁

崎義実が出家し、さらに大庭が鎌倉を追放されたのは、彼らがクーデターの首謀者であったからに他ならないと説明する。また、兄弟がねらった相手は自分たちを臣下扱いする北条時政であり、それは兄祐成が時政の腹心新田忠常に討たれたことから推測できるとしている（永井路子『つわものの賦』）。

### （3）頼朝や時政らによる常陸国武士団肅正のカモフラージュ説

仇討ちの前年、征夷大將軍に就任して盤石の体制を築いたかにみえる頼朝政権は、武士団相互の対立や頼朝体制への不満などを内部に抱えていた。常陸国における大掾一族と頼朝の腹心八田知家の確執などもその一つであった。そこで頼朝の了承のもと、八田知家や時政が画策して、仇討ちの混乱に乗じて常陸国武士団の追い落としを図った。ところが、大庭景義・岡崎義実らを中心とした一団が時政らと衝突するという予想外の出来事が起こる。さらに、この展開により弟時致が生け捕られてしまった（頼朝・時政は騒ぎのなかで兄弟を誅殺するつもりでいた）ので、結局兄弟の仇討ちを前面に出して事態の收拾を図ろうとした。そして、この事件の結果、頼朝を廃して範頼を擁立しようとする陰謀が判明し、範頼一党が肅正されたとみる（坂井孝一『曾我物語の史実と虚構』）。

以上が仇討ち事件の背後にあったと考えられる政治的陰謀についての諸説である。ただ、この事件の典拠となる『吾妻鏡』は、北条氏が自分のために描いたという編纂上のバイアスによって歪められている。したがって、事件の真相を突き止めるのは難しい。だが、この事件によって伊豆国の有力者で頼朝寵臣の工藤祐経は殺され、事件後には蒲御厨（浜松市）で生まれ育ち、遠江国と縁の深い範頼も殺害された。これらのことは時政にとって好都合なことであった。以後、時政は遠江守護に就任したと考えられ、北条氏の豆駿遠三国の支配権はここに確定したといえる。



〈図1〉関係者の略系図

### 3 『曾我物語』の成立へ

事件後、兄弟の仇討ちは盲目の語り部である瞽女たちによって「語り」として伝えられていった。『曾我物語』でも、兄弟の霊を慰めるため大磯の遊女虎（祐成の思い人）が人々に念仏を勧める場面が最後に書かれているが、その虎の意志を引き継いで瞽女たちが鼓を打ちながら諸国を歩いて語ったとされている。盲目の琵琶法師が語った『平家物語』とは対照的である。一方、兄弟の壮絶な死に様は、兄弟を「御霊神」として畏れ崇める「信仰」を生み出した。そして、この「語り」や「信仰」を土台に、原初的な「物語」が箱根権現・伊豆山権現の僧侶たちによってまとめられた。次いで鎌倉時代の末、漢文体の真名本『曾我物語』十巻が成立する（文学的意図による虚構が多い仮名本『曾我物語』の成立は南北朝・室町時代）。

1336（建武3）年2月、足利尊氏は工藤右衛門尉の旧領駿河国沼津郷を曾我奥太郎時助に与えている（『和簡礼経』所収「執事高師直施行状」）。工藤右衛門尉は祐経の子孫と考えられ、曾我奥太郎時助は曾我兄弟の継父祐信直系の子孫である（図1）。尊氏や時助が真名本『曾我物語』を読んでいた可能性は高い。すると、この恩賞は偶然のものではないかもしれない。